

東京芸術劇場 公演関連レクチャー・シリーズ
「NEO SYMPHONIC JAZZ at 芸劇 2019」公演関連レクチャー
管弦楽とジャズのコラボレーションを楽しむ！
講師：挾間美帆 モデレーター：小室敬幸
2019年6月7日(金) 19:30~21:00
東京芸術劇場 リハーサルルームL
(抜粋版～後編)

5) クラウス・オガーマン (1930-2016) とは何者なのか？

[プロジェクター画像]



小室 続いて、この同時代に別の動きとして次にご紹介したいのが、今回のコンサートでも実は目玉であるクラウス・オガーマンです。作曲家であり、一般的にはアレンジャーとして高名な人物ですけれども、こういうとてもダンディな方です。ドイツ出身で、音大で学んで最初はビッグバンドや映画で音楽を書いていたんですけれども、商業的な仕事をしていたので経済的に安定し、アメリカに拠点を移してクインシー・ジョーンズやジョービンと仕事をするようになった。

挾間 有名なものはアントニオ・カルロス・ジョービン。皆さん聴けば絶対に、あっ、これかって。

小室 そうですね、イパネマの娘とか、ウェイヴとかの有名なものも、アレンジやハーモニー付けは実はこのクラウス。

挾間 全部この人がやっている。

小室 実はあまり知られてないかもしれないのでちょっとご紹介するんですけど、実はヨーロッパ時代にチャット・ベイカーのピアノを弾いているし、ビリー・ホリデイの有名な『レディ・イン・サテン』のストリングアレンジは実はオガーマンなんです。これは、ゴーストライターだったなんて言われています。なのでもうこの当時から活躍していて、その後アメリカに行ったらジョービンをはじめ色々な仕事で有名になった。ところが、彼は最終的に 1970 年あたりから次のところに行くんです。自身のリーダー作とか、クラシックの演奏家を想定した作品が増えていくわけです。実は

作品自体は 1950 年代から書かれているんですけど、本当に基準がそちらに行くのは 70 年代ぐらい。そして 1980 年代ぐらいになると、裏方、アレンジャーの仕事をほんとうに少なくしちゃうんです。それが幸か不幸か分かりませんが。

挾間 なので私達がひとりの人物に対して、一つの章を設けるぐらい熱が入っている理由はというと、やはりジャズ史におけるアレンジャーとしての才能がちょっと群を抜いていたと思うからなんです。クインシー・ジョーンズですとか、ジャズ界を代表する書き手というのは他にもたくさん存在しますが、私達が熱を入れている一番の理由は、弦楽器に対する書き方なんです。分かりやすく言うと、オシャレで洗練されていて。原曲を壊すことなく想像力に満ちた書き方ができるという意味で、編曲者としては大変成功した人だったんです。ただし、作曲家としてはちょっと成功できなかったかな、という感じがあるような気がして、私達はそれに納得がいかないわけです。すごいカッコいい曲がいっぱいあるのに。ここで声を大にして言いたい。クラウド・オガーマン、マジ良い！

小室 今回、東京フィルを起用してこれをやるんだ、というのが大々的に出ていますからね。

挾間 そうなんです。皆さん、編曲家としてのクラウド・オガーマンは聴き馴染みがあると思うんですけど、これを機に作曲家としてのクラウド・オガーマンの良さも是非、と思っています。実はクラウド・オガーマン、1 回書いた曲を大変大事にする、という。要は使い回すっていう作曲家でもありまして。

小室 ちょっと聴いてみましょうか。

挾間 私達が紹介したい曲なので、先に説明しちゃうと思うんですけど、「リリック・スイート」（抒情組曲）という、1952 年の曲です。

小室 これが本格的な作品としては事実上の処女作ということなんですけれども、これにもうオガーマンの全てが詰まっているといっても過言ではありません。

挾間 そう、もうこの時点で物凄く完成されているんです。そしてこの曲を、ほんとうに手を変え品を変え、いろいろな編成とプレイヤーで何度も録音していますので、本人も気に入っていたんでしょうね。

小室 これは相当。だって、それこそ最晩年のアレンジアルバム、ダニーロ・ペレスとやったものの最後も、結局この最後の部分で終わっていますからね。

挾間 だからもう、これが目に入らぬか的な、僕の印籠みたいな感じなんだと思う。

小室 困ったときはこれで、みたいな感じの、もう完全にそういう扱いですよ。オリジナルは全 4 曲からなるんですけど、1 曲目の、80 年代の本人とロンドン交響楽団の演奏をお聴きください。

♪M8: オガーマン (1930-2016) / 抒情組曲 (1952)

小室 このフレーズ、出てくること多いですよ。こちらは後年に使い回した作品の一つです。でもこれがまた素晴らしい。

小室 クラウス・オガーマンが、もう亡くなってしまいましたけども、名サクソフォン奏者のマイケル・ブレッカーと組んだ『シティスケイプ』というアルバムの中の一曲です。

挾間 名盤です。

♪M9: オガーマン (1930-2016) / In the Presence and Absence of Each Other PART I

(神々の出現そして不在 パート1) ※抒情組曲からの編曲

小室 ちょっとこれは違いますね、こういうふうにはリズム隊が入るからちょっと違うんですね。そのまんまさっきのフレーズが…。こちらは Spotify とか、Apple Music でどなたでも気軽に聴けるので、是非聴いてみてください。

挾間 先程のサードストリームと全く違う響きが今度はしているじゃないですか。私、個人的にはですけれども、サードストリームの実験的な音楽に比べて、こちらは商業的な音楽からやっとならシンフォニック形式にジャズが戻ってきたな、というような、そのきっかけであったかなと思います。しかもその人が編曲だけをせずに、ちゃんと作曲をしてくれたところが大変心強いなと思いますし、同じ曲をこうやって全く違う曲に聞こえるようにお料理されている感じも、作曲家としてはその曲を大事にされているんだなと思います。ジャズ史、あるいはオーケストラが演奏できるジャズ音楽というものに、ほんとうに欠かせない作曲家になっているのではないかな、と思っています。今回、8月30日のコンサートでも、こういった理由から、彼の作品は取り入れたいなあと選んでみました。私は、個人的には一番良い曲だと思っているので、是非聴きにきてください。

6) ジャズ・ミュージシャンからのアプローチ

[プロジェクター画像]

6) ジャズ・ミュージシャンからのアプローチ

♪デューク・エリントン (1899-1974) / バレエ『Three Black Kings』(1976年初演)

♪アンドレ・プレヴィン (1929-2019) / ハニー・アンド・ルー (1992)

♪キース・ジャレット (1945-) / ブリッジ・オブ・ライト (1990)

♪チック・コリア (1941-) / ピアノ協奏曲第1番 (1999年録音)

♪ウィントン・マルサリス (1961-) / 交響曲第3番「スウィング・シンフォニー」(2010)

挾間 6章は Spotify や Apple Music で聴くことができる曲がいっぱいありまして、もちろんデューク・エリントンなどジャズを代表する作曲家もそうですけど、今活躍しているジャズ・ミュージシャンも、実はすごくオーケストラに興味を持って作品を書いている人がたくさんいます。プリント

にいっぱい名前を挙げていただいておりますので、ちょっとここは割愛しますけれども、是非聴いてみていただきたいと思います。

小室 今日のプリントのプレイリストのQRコード読んでいただくと、もうそのまま聴けるようになっています。

♪Spotify: <https://spoti.fi/2wGct2I>

♪Apple Music: <https://apple.co/31nOinU>



挾間 小室さんのnoteというホームページのQRコードも載っています。これはそのまま本として出版できるんじゃないか、という素晴らしい内容が書いてありますので、是非併せて見ていただきたいと思います。

小室 特にガンサー・シュラーとオガーマンについては、それぞれの人生を総括するような記事を書いているので、詳しく知りたい方はそちらにあたっていただければと思います。

小室 敬幸 執筆の「ジャズとクラシックの100年(1919-2019)」
<https://note.mu/kota1986/m/m5caba7d19c5f>



7) そして今に受け継がれてゆくシンフォニック・ジャズ

挾間 せっかくなので、今回のこのコンサートに繋がるお話をしようかと思います。デューク・エリントンだったりマルサリスだったり、ジャズ・ミュージシャンと言われている人が、オーケストラにたくさん興味を持って作品を書いてきましたけれども、私の中でも、ジャズコンポーザーと言われる人が、オーケストラに大きな影響を及ぼしたとしたら、その一番筆頭に挙げられる作曲家は、ヴィンス・メンドーサという人ではないかと思っています。オランダのメトロポール・オーケストラという世界唯一のプロのジャズ管弦楽団の音楽監督を、ほんとに長く務めていらっしゃいました。実は8月30日のコンサートの中でも一曲演奏するんですけども、今日はそれじゃなくて、せっかくだからちょっと違う趣旨で。さっきクラウス・オガーマンのところで、原曲はストリングスで、そのあとマイケル・ブレッカーが出ていたものはちょっと電子音楽になっていたじゃない？ 今度は逆で、もともとあった電子音楽を…。

小室 要するに電気を使っている、アコースティックじゃないものっていうことですよ。

挾間 そう。それをヴィンス・メンドーサが、オーケストラにしたという逆のバージョンをちょっと、聴いていただきたい。まず、原曲がこちらです。

♪M10: ビアード (1960-) / Hope (アルバム『AD-VO-CATE』より)

挾間 これは全部、ジム・ビアードがキーボードで演奏している 1990 年代のアルバムです。それをメトロポール・オーケストラが演奏してみました。

小室 ヴィンスの編曲ということですね。

♪M11: ビアード (1960-) / Hope (アルバム『Revolutions』より)

挾間 衝撃的だったのが、最初にチェンバロが出てきちゃって、ついにチェンバロでジャズを演奏する時代が来たか！と思って、すごく感動したんです。長い間このオーケストラとチームを組んでいたことによって、ストリングス、あるいはこういうジャズの大きい編成のために書いた作品というのは本当に数知れず、功績も大きいです。私は、是非彼の作品を取り上げたいなということで、今回 8 月 30 日のプログラムにも取り入れることになりました。彼以外にも、ジャズコンポーザーと自分で名乗って活動している人はいっぱいいるのですが、日本ではジャズ作曲家という肩書きがあまり…。

小室 日本だと挾間さんの専売特許みたいですね。作曲家って他にあまり名乗ってないですか？

挾間 あまり聞かない名前ですよ。けれどもアメリカにはそういう肩書きで活動している作曲家もいっぱいいて、ヴィンス・メンドーサの他にも、マリア・シュナイダー、ボブ・ブルックマイヤー、ギル・エヴァンスなど、是非チェックしてみてください。特にマリア・シュナイダーの作品『Carlos Drummond De Andrade Stories』は、カルロス・ドルモンドの詩にマリア・シュナイダーが室内楽の音楽を書いて、ドーン・アップショウというソプラノ歌手が歌うという、ほんとうに異色のコラボレーションになっています。こうした作品がまだこうやって今現在生まれていて、これは現在進行形のシンフォニック・ジャズなので、ゆくゆくは日本で是非紹介したいと思っています。

小室 いま、室内楽っておっしゃいましたけど、一応オーケストラはチェンバーオーケストラなのでもうちょっと編成が大きいということと、もうひとつ大事な要素として、これがグラミー賞のクラシカル・エンジニアド・アルバムというのを最近獲っているんですけども、これは本来は現代音楽のアルバムが獲るものなんです。だから一緒に、指揮者として有名なサロネンとか、そういう最前線で活躍している人がノミネートする中、急にマリアが獲ったんです。だからそれはすごく大きなことで、垣根が無くなったという言い方は簡単ですけども、でもこういった文脈で彼女が「ジャズ作曲家」でありながら「アメリカ人の作曲家」にステップアップというか、そういった評価も受けていくことになる、一番象徴的だったのがこれなのかなと思うんです。

挾間 皆さん、「クラシック作曲家」とか「コンテンポラリー作曲家」とか「ジャズ作曲家」ってカテゴリーに分けたがるんですけども、曲を作る仕事は作曲家一つで良くないかということなのです。今、おっしゃってくださったように、ジャンルの垣根を超えて、色々な作品を作っている人達ではありますが、何を持ってジャズコンポーザーというのかというと、やはりジャズの一番大きな要素である即興ですね。即興する楽器と組んだり、即興する人のために書かれた部分があるとか、即興に何かしら関連があるから、つまりそれができる人でないと演奏できなかつたりするので、ジャズコンポーザーというカテゴリーというか、名前が出てきてしまったような気がするんです。今、色々なジャンル、それこそラップだったりヒップホップだったり、R&B とかとジャズがまたコラボレーションする時代が来ていて、それらとジャズがどんどん組み合わさって新しいものになっている。そうやって（他のジャンルとコラボレーションして）発展してきたのがジャズなわけで、これからはそういうふうに関展していくと思いますので、こういうオーケストラが演奏できるジャズ音楽も入ってくれるといいな、と思います。

小室 そのためには、やはり挾間さんの書く新作がどうなるか次第なのかなと、ほんとうにそうだと思いますよ。別に挾間さんに限らないですけども、そうした人が増えていかないことには。ということで、一応ここが今日の終着点です。これからのシンフォニック・ジャズを考えるっていうのは大仰ですけども、今回、最初にも言いましたけれども、挾間さんがピアノ協奏曲という形で書くのは完全に初めてなんですよ？

挾間 そうですね。

小室 しかもソリストは同年代のジャズピアニストでも、世界ナンバーワンのひとりですよ。シャイ・マエストロは、イスラエル出身で現在はアメリカ、ニューヨークで活躍されている方です。挾間さんから見てシャイ・マエストロの魅力はどういうところにありますか？

挾間 ピアノをピアノのように弾くだけではなくて、オーケストラのように弾ける人だと思うんです。イスラエルって実は、音楽教育に凄く力を入れている、文化に凄く力を入れている国で。

小室 ユダヤ人ってそういうイメージがありますものね。

挾間 実はジャズだけじゃなくてクラシックも優秀な音楽家がいっぱい出ている国ですけども、そういう音楽教育のもとでシャイ・マエストロも育っていて、その中からキース・ジャレットのアルバムを聴いて、こういうふうになりたいって言ってジャズを選んだそうなんです。それで音楽に対する視野が広いかなと思うんです。今回のお話をしたときにも、僕も実はそういうオーケストラとの共演みたいなことをもっと増やしていきたいと思っていたんだ、と快く言ってくれて、本当に嬉しかったです。

小室 今回、新作の前にシャイが書いた曲を挾間さんがアレンジしますね。

挾間 せっかく彼自身もいっぱい曲を書いているので、彼自身の曲も紹介できたらいいなと思っています。

小室 あと最後にひとつだけなんですけれども、この曲を書くときに「ラブソディ・イン・ブルー」に続くような作品を、みたいなことをおっしゃっていましたが。

挾間 そうそう。「ラブソディ・イン・ブルー」以外のシンフォニック・ジャズって、皆さん知らなかったでしょ？ガーシュウィンとバーンスタイン以外、何が？誰が？みたいな感じがするんですよ。

小室 一般の知名度は、そうなっちゃいますよね。

挾間 だって、「ラブソディ・イン・ブルー」、さっき 1924 年と書いてあったので、そこからもう 90 年以上が経っていて。

小室 まもなく 100 年ですよ。あと 5 年もしたら。

挾間 そうですね。ジャズの歴史とあんまり変わらないじゃないですか。それなのにみんなまだそれを演奏しようとしていて、それで終わるので、そうじゃない、それ以降こういうふうにとくさんの音楽が生まれているということを紹介することにも意義があると思いますし、それを受け継いでいけるようなレパートリーを新たにつくるというのも作曲家としては使命だと思います。なので「ラブソディ・イン・ブルー」のあとに続けるような、みんなに楽しんでもらえるような、そういうピアノの協奏曲があるといいなあと思います。

小室 それをイスラエルのシャイ・マエストロが弾いて。これ一応アドリブもある予定なんですよ
ね？

挾間 そうですね。ソリストのシャイ・マエストロはジャズピアニストですので、今回に限っては、そのシャイ・マエストロがソロで暴れられる場所を作りたいなと思っていて。でもそれと同時に、じゃあ将来、例えばクラシックのピアニストが同じ曲を演奏しましょうってなったときに、それは流石に困っちゃうと思うんですよ。

小室 それで演奏されないっていうのも悲しいですね。

挾間 やはりクラシックの演奏者の皆さんは楽譜があつてこそ。そういう人でも再演できるように将来的にはちゃんと整えるつもりでいます。なので、そのバランスなんですよ。アドリブがどのくらいで、それとは別にオーケストラの対応はどのくらいで、しかもどんなアドリブにしてもらいたいのか、逆に完全に預けてしまうのか。それともオーケストラとバトルするのか、とか。実は今書いている時期なんですけども、そういうバランスを今は練っているところです。

小室 では質疑応答しますので、ご質問あれば是非挙手いただければと思います。

お客様 1 お話にも出ていますように、シンフォニック・ジャズがだんだん盛り上がってきていると言いながら、結局コンサートに行ってみるとガーシュウィンとバーンスタインしかないみたいな状況があります。ジャズの歴史の中で色々生まれてきたサウンドが、クラシックのオーケストラに

持ち込まれて演奏される機会ってほとんど無いという閉塞感を、今回の企画が打破してくれる、また挟間さんしか打破できないんじゃないかと思って期待しています。ただシンフォニック・ジャズの限界なんじゃないかっていう感覚があるのは、例えば武満徹さんが、デューク・エリントンに憧れたのだけれど、ほんとうに演奏を聴いてみたら、もちろんスコアも素晴らしいんですけども、結局それはデューク・エリントンのスコアじゃなくて、演奏者のジョニー・ホッジスとかカーネイが凄っていうことで出来ていることであって、結局俺は学ぶことはないとアメリカから帰ってきてしまう、という象徴的な話もあります。あとは挟間さんのスコアにしても、m_unit に対して書かれていて、誰が演奏してもいいんだ、っていう話でもなかったりするということもあると思います。結局ヨーロッパのオーケストラの文化っていうのは、オーケストラがあれば、ほんとスコアに対してそれなりの音が出せる、っていうところだと思うんです。かたや、シンフォニック・ジャズの面白いところで、演奏者に紐付かないと結局面白いことが出来ないんじゃないか、っていう賭けがあります。挟間さんもそこを理解されてやろうとしていると思うんですけども。その演奏者がいではじめて成り立つ音楽、シンフォニック・ジャズはどうすればいいんだというあたりをちょっと伺いたいと思います。

挟間 個人的な信念としては、シンフォニック・ジャズの代表作、私たちが親しんでいる「ラブソディ・イン・ブルー」とか『ウエスト・サイド』の「シンフォニック・ダンス」とか、そういうものってこれだけ愛されて再演されているわけで、それはすべてクラシックのオーケストラが演奏しているということを考えると、奏者を選ばなくても演奏できるシンフォニック・ジャズのスコアというのは存在し得るわけです。だから、私やデューク・エリントンが奏者を狙って書いているというのは、もうそれはそういう類の音楽であり、そうではなくて不特定多数の誰が演奏したとしても演奏できる音楽、というふうに書くのはもちろんこちらの責任だと思います。それと同時にオーケストラの凄いところは、やはりみなさん真面目ですので凄く練習します。それはジャズがその場でパッと読んでその場でなにかするということと、違うエネルギーが生まれる可能性があります。そうなったときにほんとうに面白い。オーケストラの醍醐味というのはあると思いますので、それを最大限に引き出せるようなレパートリーを増やすというのは作家の責任でもあると思いますし、自分自身もそうやっていきたいなと思います。

小室 武満徹さんのエピソードは私も存じておりまして、それでじゃあ学ぶことが無かった、と言ったかということ実はちょっと違って、そのあと戻ってきて何をしたかっていうと、彼は特定の演奏家を想定した曲をいっぱい書くようになります。しかもそういった曲が、その演奏家じゃないと魅力的じゃないかっていうと、今現在また別の世代が演奏して、違う魅力になっているわけじゃないですか。だからそれは、シンフォニック・ジャズとか、あるいはジャズとか、っていうそういう問題ではなくて、新しい音楽では往々にしてあることです。次の追走する演奏者が現れるかという問題はありますけども、別にこれはシンフォニック・ジャズに限った問題では無いかな、と私は思います。

お客様 2 先程クラウス・オガーマンの話が出ましたが、ちょっと恥ずかしながらあんまり聴いたことがなくて、今日初めて聴いたぐらいです。彼の音楽のジャズ的な要素はどこにあるのかなっていうのは聴いていてちょっと疑問に思いまして、ハーモニーのところは分からないんですけど、少なくともリズムはジャズのスウィングのスタイルでは無いっていうのは分かったんですけど、どん

なところがジャズ的な要素なのかなっていうのを疑問に思いましたので、お聞きしたいなと思いました。

挾間 彼がそもそも有名になった経緯と、あとはリズムではなくて和音というのが二つのポイントだと思っています。まずはジャズ・ミュージシャンたちのため、あるいは映画とかブロードウェイの音楽のためにたくさんの作品を最初に書いていたのがキャリアの最初でありクライマックスでもあったがため、そういう作品にとてつもなく浸った状態で作曲家になっていることが、ジャズの要素をいっぱい引っ張ってきてくれた大きな要因かなと思っているというのがひとつ。それから彼自身が曲を作ると何故かリズムカルな曲をほとんど作らないんです。それは凄く不思議なところで、となるとやはり重要なのはそこで使っている和音になります。その当時、こういう和音を使うというのはなかなか他の作品には無かったものですから、オシャレ和音といいますか、ドミソだけでは片付けられない、もうちょっと複雑な和音みたいなものをうまく組み合わせているところが凄くジャズっぽいな、と私は思っています。

小室 先程、「叙情組曲」とその別バージョンをお聴きいただきましたが、先程も言った通り、いろいろなものがあるんです。そしてその演奏者が変わると物凄く印象が変わるっていうのが、やっぱりクラウス・オガーマンの一番面白いところのひとつだと思います。それは何かって言うと、同じ音楽のはずなんです、なぜか演奏者とか編成が変わるとガラッと印象を変えてしまう。なかなかこういうバランスの人って他にいないんですよ。という意味では確かにパツと聴き、ジャズには聞こえないかもしれないですけども、でもジャズ・ミュージシャンがやるとやっぱりクラシックではないものになるわけです。そのバランス感覚だからこそ、他の人が持ってない魅力のものを書けたわけですし、逆に言うと、うまく評価できなかった理由なのかなということもあります。凄く一部のオガーマンマニアが大好きで、一般的にはなんかそういうマニアが好きなもの、みたいな感じの立ち位置で、やはり歴史的な文脈に位置づけられなかった。本人がそういうアカデミックなものと距離をとって、まさにガンサー・シュラーと真反対な考え方だったんですね。そういった理論的な部分なんかどうでもよくて、とにかく人を喜ばせる音楽を書きたい、という人だったので、そのへんが彼の立ち位置を微妙にしているんですけど、逆にこれから聴いていくことで、ああいうジャズもあるんだなっていうふうになっていけば良いと、今後に期待しています。

お客様 3 今後シンフォニック・ジャズがもっと人気が出るために、先程もヒップホップとかっていうお話がありましたけども、例えば他のジャンルとのコラボレーション、例えばマリア・シュナイダーは、僕はデヴィッド・ボウイの最後のアルバムに参加していて、それで初めて知ったんですけど、挾間さんにもそういうのを期待しているんですけど、そういう活動とかっていうのは今後どんな感じなのでしょう。

挾間 ジャズコンポーザーとして出来ることは何でもやりたいと思うんですが、それ以外に私はアレンジャーとしても活動していて、それを結構広く浅くやろうと思っています。今までやったことがあるので面白いのは、五木ひろしさん、エヴァンゲリオン、あとゲーム。でもそれはアレンジャーとしてなんです。ジャズコンポーザーとしては、ジャズを活用して何か作れるように、今の自分のブランディングをしているような時期なので、それに興味を持って声をかけてくれる人がもしもいるならば、是非やってみたいなと思います。なんかこうロックっぽい、ジャズロックみたい

なものや、弦楽四重奏とか、それこそキース・エマーソンとかそういったものに近づいてみたりとか、ジャズの要素を使って将来的にもっと幅広い活動ができるように、コンポーザーとしてはそれを目指しています。

というわけで 8 月 30 日の金曜日は 19:00 から、東京芸術劇場のコンサートホールにてこの「NEO SYMPHONIC JAZZ at 芸劇」第一弾！テーマは、ザ・シンフォニック・ジャズということで、オーケストラだけで演奏できるジャズ音楽を皆さんに…。

小室 ポイントになるのは、ドラムが…。

挾間 ドラムとか、そういうジャズ・ミュージシャンがいないんです。オーケストラとシャイ・マエストロだけで「ラプソディ・イン・ブルー」以外に一体どんなことができるのか、ということです。

小室 『ウエスト・サイド』以外もね。

挾間 という縛りで、渾身のプログラム選びました。

小室 私が注目しているのが、ガーシュウィンをやるんですけど、『ガール・クレージー』序曲って、なかなかやらないんですよね。ご存知ない方のために言うと、実はほとんど出てくるメロディーは「アイ・ガット・リズム」なんです。「アイ・ガット・リズム」の出てくるミュージカルの序曲なので、メロディーがほとんど一緒なんですけれども、ところが殆どやらない。超いい曲ですもんね。

挾間 そう、華やかだし、「アイ・ガット・リズム」序曲にすれば売れたかもしれないのに、「ガール・クレージー」序曲だったから名前が損しちゃっている。

小室 そうなんですよ。

挾間 まあ、そういうのも含めて、渾身のプログラムを選びました。